

インド紅茶史外伝

—— 鉄道駅のポスターにみる「チャーエ (チャイ)」誕生の兆候

村山和之

—— Abstract

This research note examines the beginnings of Chaay, which is now prevalent as Indian-style milk tea in the tea culture that is prominent and deeply rooted as a necessity in the life and culture of South Asia, based on four poster images that the author happened to encounter and document during her and my travels.

The author has long wanted to know when and how tea drinking began in India, and the connection and developmental history of Chaay, which continues to evolve and is still consumed today.

Here we explore the origins of Chaay, an unexpected bastard child of the Tea Board of India's early 20th century national tea promotion campaign, which was born in a railway station as a cradle.

In 1920, shortly after the end of the First World War, the first generation of Chaay was born. This article traces the history of Indian tea up to that time and foreshadows the birth of Chaay, the tea drink that has swept South Asia.

Today, Chaay continues to grow in many parts of South Asia, but it has only been 100 years in the making.

—— 要旨

本研究ノートは、南アジアの生活文化に顕著であり、必需品として深く根を下ろしている茶文化の中でもインド式ミルクティーとして現在流布している「チャーエ Chaay」の始まりを、旅先で偶然出会い、記録した4枚のポスター図像を中心に考察するものである。

筆者にとって、いつからどのようにインド人に紅茶飲用が始まったか、そして現在も飲用され進化し続けるチャーエへの接続と発展史はかねてより知りたいことであった。

ここではインド紅茶協会による20世紀初頭の国内紅茶販売促進キャンペーンの中で、鉄道駅を一つの揺りかごとして誕生した、協会側にとっては予期せぬ私生児であったチャーエの出自を探る。

1920年、第一次世界大戦が終了してまもなくチャーエの第一世代が産声をあげる。

本稿ではその直前までのインド紅茶史を辿りながら、南アジアを席卷する紅茶飲料：チャーエの誕生を予見したい。

現在もチャーエは南アジア各地で成長を続けている、しかしその歩みは100年でしかなかったのだ。

はじめに

1986年に初めてインドから南アジアの地を旅行者として歩きはじめ、1992年からは留学生・生活者としてパキスタンで過ごした筆者であったが、チャーエに関しては特に注意を払わずに生きてきた。

強いてあげれば「ご馳走になる飲み物」としての認識は実体験として多々ある。思えば、あの時もこの時も、家に呼ばれた時も、買い物先で商談の前後も、遠くから来た旅人をもてなす挨拶としても、いつも茶代を払うことなくご馳走になってきていたのである。

チャーエは、喉の渇きや食欲を満たすのみならず、日常の中で特別な時間を創出して相手と共有するための重要な装置として機能してきたわけだが、それはいつからなのだろうか。諸説聞こえてくる。どの説も「ありうる」けれど、自ら検証するまでの情熱は傾けられないまま、資料が劣化するにまかせていた。

2018年の3月、パキスタン・イスラーム共和国の首都イスラマバードに当時置かれていた朝日新聞社支局で、パキスタンとアフガニスタンで精力的に取材活動を展開していた特派員：乗京氏は、一枚の写真データを見せてくれた。筆者の目は釘付けになってしまった。

氏としてはイスラマバード郊外ゴールラー・シャリーフ Gorla Sharif に位置するイスラーム神秘主義聖者の聖者廟（ダルガー dargah）取材がメインであり、たまたま足を延ばしたゴールラー・シャリーフ・ジャンクション駅で撮影したスナップ写真を見せてくれただけのことであったろう。

この鉄道駅に鉄道博物館 Pakistan Railway Museum がオープンする直前だという。展示品は屋内だけでなく、現在も使用しているプラットフォームや引き込み線といった屋外にも多々見られた。屋内に収容するには大きすぎる車輻たちがその主役だった。

現在も使用されているプラットフォーム内の大きな掲示板には雨に破れかけそうな街角のポスター（看板）が「展示資料」としてビニールでコーティングされながら掲げられていた。動態保存といえは気が利いた言い方ではあるが、あるいは100年前と変わらぬ使用方法だったのかもしれない。

そのポスターとは、約100年前に英領インド政府によって政策として始められたインド国内における紅茶販売促進計画のものと思われる。天然色イラストを施し、一見して誰の目をもひくデザインでヒンドゥー教徒・イスラーム教徒・シク教徒を対等に描き、英語・ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語によるキャッチコピーによって多くの識字者に訴えようという意図も明白である。

「これはまだこんな状態でこの駅にあるんですか？」「えらいことですよ！」。驚いて尋ねた筆者に驚き返してこたえてくれた乗京氏は、事の次第を理解し、超多忙生活にもかかわらず、取材時間を割いて筆者を伴い現地へ急行してくれた。まとまった雨の季節までは遠いけれど、いつ気まぐれ雨でポスターがより痛むとも限らない。一刻も早く実物を実見し

たかった。

3月11日、慌てて鉄道駅を走り回る日本人二人であったが、ポスターがプラットフォーム掲示板に見当たらない。「遅かったか」「廃棄されたか」「価値が分かる盗人にやられたか」「お目が高い!」。様々な思いが渦巻く中、博物館内に移動したことを駅員さんに告げられ安堵する。

オープン前なので屋内展示品は「まだ一般公開していないけれど」、と女性の博物館学芸員は私たちにチャーエをご馳走してくれた後、自ら案内して扉を開けさせ、写真撮影をも許可してくれた。本文で扱う図像4枚はこの際に撮影されたものである。シュクリヤ(多謝)。

現在パキスタンのパンジャーブ州にある駅から寄贈されたとされるこれらのポスターは、大半がヒンディー語であるために、まだ十分解析されていないという。しかし、貴重な資料としてその価値を認め収納品として責任を負った文化的見識の高さは大いに評価してよい。

本稿では、ポスターに記述された原語を翻訳してその内容を提示することで、当時のチャーエ販促キャンペーンの実態の一部を推測したい。リジー・コリンガムの『インドカレー伝』[2006]⁽¹⁾の「第8章 チャイ 紅茶大作戦」がこの時代の歴史背景と食文化史に詳しいので、手元において学びながら、自分で収集した資料の位置づけを行う形で考察を進める。

さらにこの紀要に掲載されることで、この分野の先学や興味を抱く人に広く読まれ、賛否両論からなる建設的な批判を得たい。最終的には、インド人はじめチャーエが不可欠となってしまった国の人々の協力を得て共同研究が実現し、その際のテキストの一つとして共有されることを望み、翻訳・考察を進めたい。

第I章 チャーエ(南アジアのお茶)について

I-1. 茶の呼称について

パキスタンでは、チャーエを見知らぬ人からご馳走にならなかった人を、筆者は今まで知らない。しかしながらインドでは、同じ条件でご馳走になった人をほとんど知らない。

茶の生産大国であり消費大国であるインドと、国内生産がほぼゼロに等しく輸入&消費大国パキスタンとは、お茶に対する文化的意識が異なることは想像に難くないが、印パ比較茶文化考は別の機会を待つとして、本稿で扱うチャーエの身上を問う作業から始めよう。

日本では「チャイ Chai」として呼ばれてきた茶ではあるが、インド北部からパキスタンにかけて話されているヒンディー語やウルドゥー語では、辞書によれば、正しくはチャーエと第一音節は長母音で始まる単語である。語末は半母音で短くエ、またはエとイの中間のような曖昧な半母音がおかれる。この言葉はチャーイー(イにアクセント)と発音するペルシア語から入ってきたもので、もともとインド語由来ではなかった。

茶は元々中国南西部から発したものである。この茶が大航海時代を経て海を渡ってヨーロッパにもたらされた時、二系統の読み方に則して呼称が分類された。

まず、cha 系で、これは中国南部の広東語 ch'a から発した呼び方で、日本では古くから(平安時代)あったが、17 世紀以降、南アジア諸国～中東をカバーして、欧州に伝わった。

南アジアではヒンディー・ウルドゥー語: チャーエ、ベンガル語: チャー、ネパール語: チヤー。西アジアではペルシア語: チャーイー、トルコ語: チャイ、アラビア語: シャーイー。ヨーロッパではロシア語: チャイ、ポルトガル語: チャ、などとなった。

大航海時代の頃に、ポルトガルがイエズス会とともに船に乗せて西に運んだ経路と、陸続きに中国から中央アジアを経由してもたらされたルートがうかがえ、日本茶も欧州に渡った。

次に tea 系の呼称であるが、これは中国南東部の福建語 (福建省、台湾の対岸部) te / tay から生じたもので、オランダ東インド会社の船で海を渡り広まった呼称が生ずる。

英語: tea、フランス語: thé (テ)、オランダ語: thee、ドイツ語: tee など、ほぼティーの音で呼ばれるものとなる。

I-2. 北インド地域における呼称について

19 世紀に出版されたヒンドゥスターニー語 (ウルドゥー語とヒンディー語をあわせて呼んでいた時代の呼称) の二つの辞典から、この時代の二大辞典と呼ばれる (A) ファロン版 [Fallon 1879: 514] (図 1) と (B) プラッツ版 [Platts 1884: 416] (図 2)、そして (C) プラッツ版 [Platts 1884: 420] (図 3) にチャーエに関する箇所を訊ね、呼称を確認してみよう。

図 1 (A) ファロン版

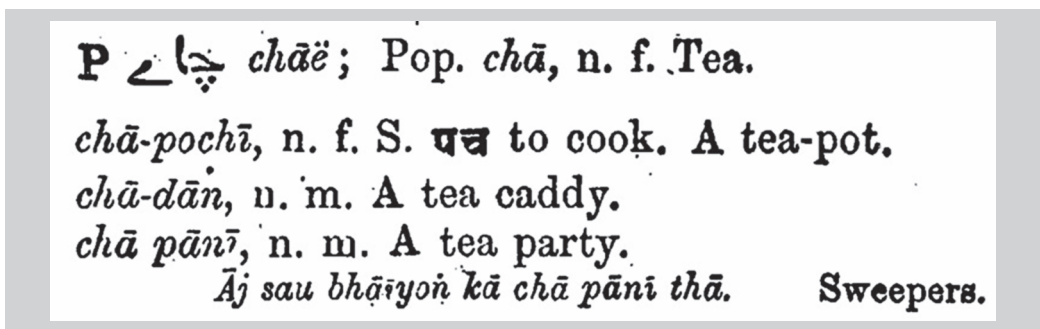


図 2 (B) プラッツ版

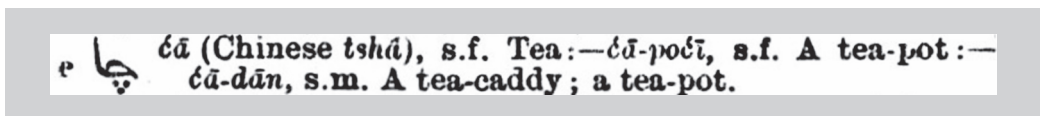


図 3 (C) プラッツ版



(A) ファロン版

chaae, Popularly. *chaa*, n.f. Tea 「チャーエ」 ペルシア語、通俗的に「チャー」、
女性名詞『茶』

chaa-pochii, n.f. Sanskrit. *paca* to cook, A tea-pot 「チャー・ポーチー」
女性名詞『ティー・ポット』

chaa-daan, n.m. A tea caddy. 「チャーダーン」 男性名詞『茶筒、茶缶』
(→ダーンは「容器」 by 村山)

chaa paanii, n.m. A tea party. 「チャー・パーニー」 男性名詞『茶会』
(→パーニーは「水」、by 村山)

Aaj sau bhaaiyon kaa chaa paanii thaa. Sweepers.

「本日、大きな（数百人の兄弟分の）茶会があった（訳 by 村山）」

(B) プラッツ版

ca, 「チャー」 ペルシア語（中国語の *tsha* より）。女性名詞。

表記法は違えどファロンとほぼ同じ内容。「チャーダーン」に『ティーポット』の意味が加わっている。

(C) プラッツ版

ca'e, 「チャーイエ / チャーエ」 女性名詞『茶』 チャーと同じ

I-3. チャーイはペルシア語から

ペルシア語は現在イラン、アフガニスタン、タジキスタン、ウズベキスタンの諸国で行われているが、中国と共にアジアの二大文明圏を構成するイラン文明圏の首位言語で、アジア西部でのリングワ・フランカ *lingua franca* つまり「共通語」・「共商語」であった。インドでも10世紀以降イスラーム諸国の侵入時代から使われるようになり、16世紀に成立したムガル帝国でもペルシア語が公用語であった。

デリー、ラホールなど北インドからパキスタンにかけてを拠点に隆盛を極めたムガル帝国は中央アジア、現在のウズベキスタン発祥の政権で、イスラーム教の布教とは全く関係なくインドを征服しにきたトルコ系王族の国家であった。宮廷言語はペルシア語、中央アジアの文化と習俗をインドにもたらす大きな動脈を構築した、アフガニスタンからパキスタンそしてインドに跨る帝国であった。

当然、モンゴル帝国時代にもたらされ、中央アジア時代に身に着けていたであろう喫茶文化も一緒にインドへ運んできたと推定されるが、中央アジアに茶が持ち込まれたのは16世紀初頭以降であるという説が有力である。その論拠はムガル帝国初代皇帝バーブルの回想録である『バーブルナーマ』に茶に関する記事が見当たらないことによる。

バーブル自身の筆でチャガタイ・トルコ語を用いて書かれ、中央アジアの様々な産物や生活習慣などの様子を細かく綴っているのにもかかわらず、茶に関する記事が見当たらないのである。バーブル自身は東トルキスタンのフェルガーナ生まれであり、現在のタジキ

スタン、ウズベキスタン、アフガニスタンの諸々の地で征服と敗退を繰り返す中で実見した貴重な博物学的情報も多々書き残しているのに。

時代が下って征服したヒンドスターン（インド）においても、喫茶文化の定着時期は詳らかではない。むしろイスラーム商人や若い貴族たちの流行りは、中東諸国で人気を博していたコーヒー（カフワー/カーワー qahvah）であったが、これとてイスラーム教徒に限られた嗜好品であり、非イスラーム教徒にとっては、カースト外の民が集う喫茶店などで飲食できなかった。

I-4. ヨーロッパ人の茶に関する記述

ムガル帝国時代、新たなキリスト教布教地と貿易地を求めてインドへ到達したポルトガル人（バスコ＝ダ・ガマやザビエル等）は、インドにおける茶について記していた。アーチャルヤー著の『インド料理歴史辞典』[Acharya 249] から読める内容をここに記す。

1662 年 Mendelso の記述

「インド人に飲茶の習慣はないが、西欧人の中では毎日のミーティングの際に、薬用目的でお茶を飲むことが普通であった。胃を健全にし、痰をきるのに効用があった」

1665 年 Jean de Thevenot の記述

「ブラフマン（バラモン、司祭）はコーヒーや茶を入れた水以外は飲まない」

1689 年 Ovington の記述

「(西インドの港湾都市) スーラト在住のヒンドゥー商人層：バニヤーは、砂糖を入れないお茶か、レモン汁を搾ったお茶を飲んでいる。これらのお茶に香辛料を加えたものは、頭痛、結砂病、腹痛の治療に使われていた」

三件を比較すると、一般インド民衆の間で喫茶の習慣が無かったことが共通して読み解ける。在印西欧人の中でも、一部のヒンドゥー教徒の中でも、茶を飲むことは薬用として認識している。

ブラフマンはコーヒーや茶を入れた水以外は飲まない、とあるのは文面通り取ると混乱しそうになるが、これは、茶やコーヒーの実物を直接意味するのではなく、バラモンたちが伝統医療『アーユル・ヴェーダ』に基づいて健康のために常用している、ある種の薬草茶を指しているとも考えられる。

しかし、茶やコーヒーに薬用効果があると認めた進歩的なバラモンは、浄不浄の伝統的概念が当てはまらないこれら「外来の食品」を飲んでいたことも否めない。さらに時代が下ってイギリス支配を迎えると、紅茶販売促進政策の結果、バラモンのみならずインド民衆が徐々に茶を飲むようになるが、「紅茶は中立的なため、通常は飲食をともにするのを避

けようとするカースト出身の相手とも、とがめられることなく一緒に飲みやすかった」[コリンガム 262] 事態が生じることになるのはまだ先の話だ。

I-5. 東インド会社時代からの「茶」

いずれにしても、この 17 世紀インドの時代では、茶は高価な薬として用いられ、現在のようない日常飲料としては、利用できる時代ではなかった。

ここで飲まれていた茶は、紅茶でなく緑茶である。イエズス会が伝えた日本の茶もあり得る。確かなことは 1610 年には、オランダ東インド会社によって初めて茶、それも日本の緑茶がオランダに渡り、それはやがてフランスやイギリス諸国へも伝わってゆくことだ。

18 世紀初頭、喫茶の習慣が広まっていたイギリスでは、砂糖とミルクを入れて中国産緑茶を飲んでた。中国人は本来紅茶を飲まず、商品として対外向けに製作していた紅茶が緑茶にとってかわられるのは、18 世紀半ばのことで、これは西インド諸島・キューバなどへの奴隷投入によって砂糖が入手しやすくなったことと連関している。イギリスの水にあう茶、ミルクと共に飲むのにより適した茶の需要は増加の一方を辿ることになる。

茶の供給先としては、中国（清）が一強であった。輸送体制も整い、紅茶にかかる関税が引き下げられたことも伴い喫茶の習慣が流布してきた大英帝国では、茶代がかさみ、19 世紀にはアヘン戦争も起こることになる。何とか遠い中国からではなく、植民地化を進めていたインドでお茶が作れないか？ ブリテン島の英国民に安定して茶を供給するよう至上命令が下ると、彼らイギリス東インド会社は 1793 年、使節団を中国へ送り、移植を試みたが、失敗に終わった。日本も含め中国茶樹の学名は、カメリア・スィネンシス *Camellia Sinensis* で、椿の仲間だが。この種はインドの気候には中国式の栽培法では不向きだった。

1815 年、インド北東部のシンポー族がインド自生の茶を食用・飲用しているという民族事例が報告された。インド北東部とは、かの有名なアッサムが位置する地域で、文化も東南アジア、ミャンマーやタイの民族と共通しているところである。1823 年、ロバート・ブルースがアッサム北東部の山地で、中国種とは品種が異なる自生アッサム種の茶樹を発見する。

こののち紆余曲折を経ながらも、商品化を試行し、1839 年、アッサム茶が初めてロンドン市場に登場する。それでも新参者のアッサム茶は中国茶にはかなわなかった。

1840 年のアヘン戦争で中国を半植民地的従属国にしたこともあいまって、まだまだインドでの生産量も充分ではなく、商品化は遅々として進まずであった。しかし、徐々にペースを上げ、ダージリンに茶園を築き（中国種の茶栽培）、セイロン（現スリランカ）でもトーマス・リプトンによる栽培が進み、現在の基礎を築くことに成功してゆく。

しかし、まだインドの民衆には喫茶の習慣は届いていない。彼らは日常にはミルク、バターミルク、お湯、薬草を入れた常温水、ただの常温水などを用い、茶を飲もうという意識はなかった。あくまで高価な薬として認識され。イギリスがもたらした習慣に迎合する

一部の富裕・インテリ層インド人の中でだけ tea は受け入れられていった。

アクバル・アラハバーディー（イラーハバーディー）Akbar Allahabadi (1846-1921) というイスラーム教徒の詩人が書いたウルドゥー語詩⁽²⁾の英訳を下に載せてみた。

この詩は。イギリスの統治が進んでくる中で、伝統的インド文化の良俗が浸食され変化してゆく時勢を批判的にうたっている興味深い資料となろう。

1. Beside the calls to prayer, there is the waking whistle of the “engine”; About this very [issue] the Sheikh has beaten his breast.
2. Where among us are remaining those [Qur’anic] recitations of the morning? In place of the recitations [of certain verses] are, “O ‘Pioneer,’ O ‘I.D.T.’”
3. Thus now are gone the days of sherbet in front of friends, O Akbar; sometimes [it] is “soda,” sometimes “lemonade,” sometimes “whiskey,” sometimes “tea.”

1. では「朝にモスクでの礼拝時間を告げる呼びかけの声（アザーン）の代わりに聞こえてくるのは、けたたましい自動車のエンジン音、モスクの長たちは胸を叩いて悔しがっている」

2. では「聖典『クルアーン（コーラン）』の朝の朗誦はどこへいった？聞こえてくるのは英字新聞配達係の声ばかり『パイオニア』で一す、『I.D.T.』で一す」。このように朝のインドの日常的イスラーム教徒の音的風景が、異質な音に声に乱されている様子が描かれている。

3. には伝統的飲み物が新しい舶来物によって壊れてゆく様子が描かれる。「来訪した友にシャルバットを飲ませていた良き時代は過ぎ去った。アクバルよ！ いまは、ソーダ、レモネード、時にウイスキー、お茶ときたもんだ」。シャルバットとは、シャーベットの語源となったペルシア語の言葉で、果物の甘いシロップを指し、水で割って飲むものだ。そのシャルバットを駆逐しそうな新参飲料として“tea”が加えられている点に注目できる。

I-6. 大英帝国インド帝国のお茶：チャーエの誕生

さて、イギリスのインド統治の下で喫茶文化がインドの上層階級の一部に伝わり、受容されていたことは分かった。では、現在につながる流れで、インド人やパキスタン人がお茶を、チャーエを飲むようになったのはいつ頃から、どのように始まったのか？

これも大英帝国インド帝国のお家事情による。1901年からインド紅茶協会は、輸出向けの方針に加えて、インド国内でのマーケティング活動を拡大してゆく。具体的には一人の監督官と二人の「如才ないヨーロッパ人旅行者」を雇って、食料品店を訪問し、紅茶を仕入れてくれるよう説得することから始めた[コリンガム 253-4]。この紅茶販促セールスマンたちは、インド各地に出張し、リプトンの安い紅茶を売って喜ばれたり、飲み物にした紅茶を役場や商社などに毎日配達する活動も展開して努力したにもかかわらず、14年間

の努力の結果は芳しくなかった。

転機は1914―18年にかけてヨーロッパを舞台に勃発した第一次世界大戦である。インドが主戦場とはならなかったが、ヨーロッパに兵士や物資を供給するため、インド国内も慌ただしく時代の波に飲まれてゆく。インド紅茶協会はこれを好機ととらえて行動した。

インド国内の工場、炭鉱、綿紡績工場をターゲットに経営者を説得し、労働者のために紅茶を飲む休憩時間をとるようにさせ、紅茶の屋台を設置した。喉が渴いた労働者たちはそこで紅茶を買わざるを得なく仕向けられたのである。

職場で紅茶を飲む習慣を身につけさせられた労働者は、家族や友人たちにも紅茶を飲むことのイメージを語り、その効果こそが紅茶販売に利益をもたらす。紅茶協会の期待は的中する。1919年には事業体にとって重要な要素として、紅茶の売店はしっかりとインドの地に根付いてしまっていた。

「こうして紅茶は、二十世紀のインドに侵略しつつあった近代産業に不可欠の要素として、インド人の生活の中に入り込んだのだった」[コリンガム254]。

紅茶協会が仕掛けたもう一つの大作戦は、鉄道を利用することだった。「彼らは少数の契約者にやかん、カップ、紅茶の包みをもたせて、パンジャブと北西部の国境地域、およびベンガルの主だった鉄道の連絡駅ではたらかせた」[コリンガム255]とある。

次章で扱う紅茶販促ポスターには、パンジャービー語、ベンガル語、英語、ヒンディー語そしてウルドゥー語といった、パンジャブと北西部の国境地域、およびベンガル地方で通用する言語の表記が見られる。この時代の駅での紅茶販促キャンペーンの一環として製作され、駅構内の販売所や人目を引く場所に掲示されていたことが十分に推測できる。

イスラーム教徒と違って、浄不浄の概念が生死に関わる宗教生活を送る高位ヒンドゥー教徒は、旅行する際には水と食べ物には苦勞していた。低位カーストが汲んだ水は飲めないし、食べ物も買うことができない。そこで彼らは中立的な、外来飲料である紅茶を大いに飲むようになった[コリンガム255]。

鉄道駅では列車が到着すると、いつも通りのイスラーム教徒用の水売り、ヒンドゥー教徒用の水売りの客引きの叫び声の間に、「ガラム・チャーエ！ ガラム・ガラム・チャーエ（熱いお茶だよ！アツアツのお茶だよ）」と紅茶売りの声が割って入るようになった。

この際に、インド人の紅茶販売人はヨーロッパ人指導員が「正しい紅茶の淹れ方」を指導していたにもかかわらず、自己流で牛乳と砂糖をたっぷり入れた紅茶を作っていた。とっても甘くて牛乳がたっぷり入った美味しさに加えて、スナックやパンなどとも相性がよく、宗派の壁を越えて誰でも飲めるこの飲料は大いに好評を博した。

こうしてインド式の「チャーエ」は、イギリスが築いたインド統治の牙城の一つである鉄道駅で生まれたのだ！

痛快な話である。ミルクの利用法なら教わることはないほど確立していると自負するインド人紅茶販売人に、道具一切を任せ、マニュアル通りに紅茶の作り方を教えて支配できるとでも思ったのであろうか？ 外来のものを強制的に強いられても、一時的には受容す

るものの、それを学び終わると自分たちに合うものへの挑戦を始め、最終的にはインド風のものを見事に作り上げてしまう、現在ますます顕在化して人々を驚かせているインド人の特質はいつの世でも健在で、具体的な形をとってあらわれる。

イギリス、紅茶協会の目論見とは違う形で紅茶の普及に一役買ったのが、これまたインド風紅茶の代表といえる「スパイス入り紅茶」マサーラー・チャーエであった。インドでの正しいイングリッシュティー、つまり周到にデザインされた茶葉の販売量とそれに伴い算出される利潤を導き出す方程式の上で成り立っているインド国内紅茶販促普及キャンペーンは、牛乳と砂糖そしてスパイスと反逆心が日常的に入手できる時代のインドにあっては、当初の目的は達成できなくなってしまったのだ。

現在の UP 州カーンプル市の製造所（工場か？）あたりで、「スパイス入り紅茶」と呼ばれる、お粗末な方法で煎じられたまずい飲料」[コリンガム 256] が見つかってしまう。第一次世界大戦中に、労働者を紅茶中毒にするために工場あたりに自ら蒔いた紅茶屋台の種は、インドの様々な香辛料と交配して雑種化し、想定を超えてインド人の中で花を咲かせていた。

紅茶に香辛料を入れて、インド人向けによりアレンジして販売すること自体は、さほど大きな問題ではなかったが、大きな問題となったのは、紅茶の販売人たちが一杯のチャーエに使用すべき公定の茶葉量を減らしてこのお茶を売ろうとする傾向にあったことだ [コリンガム 256]。慌てた紅茶協会はすぐ「上等な紅茶飲料販売」[コリンガム 256] で対決するが、いったん生まれてインド人消費者に支持され流布しているものを抜根除草するなど容易にできるはずもなかった。因果応報を意味するヒンディー語格言の一は、『蒔いた者が刈り取る』であるが、紅茶協会にとってはまさに茶の苦汁を舐める結果となってしまった。

このマサーラー（材料、具、香辛料も含む）を自前で調達できるという整った環境の舞台へ、紅茶という主役を無償で与えてしまった以上、支配人と演出家を紅茶協会が独占しながらも、本番中の全責任者である舞台監督が自立心旺盛なインド人であったらどんな見世物になり、そのハプニングの危機管理が追い付かなかったら、その顛末はどうなるか？シェークスピア（1564-1616）が存命ならば面白い脚本に仕立て上げたであろう、スパイシーでスイートなじゃじゃ馬を、或いは妖精の女王がインドからかどわかしてきた「とりかえ子」を、いかにして馴らせるかどうかの喜劇を。

こうして現在もなお北インドを代表する国民的飲料の二つ、とても甘いミルクティー：チャーエとスパイス入りチャーエ：マサーラー・チャーエが、「新たな食材を取り入れつつも、インド式に調理してそれを変容させる、いつもながらの彼らの傾向 [コリンガム 255]」が現実的な形を求め、「いつまでもイギリスの指図通りには動かない」という意志を行動で示しはじめたインド人の、抵抗心と対抗心を以て加熱・攪拌された乳海の中から誕生した。

I-7. 大英帝国インド帝国のお茶：宣伝キャンペーンがもたらしたもの

キャンペーンの別動隊によって大都市と港に開かれた紅茶専門店チャーエとマサーラ

ー・チャーエは、しかしまだインド人家庭の台所にまでは浸透していなかった。外にお茶を飲みに行く習慣のない女性層を標的に定め、紅茶協会は販売促進活動を緩めない、「紅茶デモンストレーターの一団が雇われ、大きな町や都市に進軍していった」[コリンガム 255]。それぞれの町で特定の街区が選ばれ、日曜日以外の毎日、同じ時間に各戸を訪問して、可能な限り屋敷内で紅茶を淹れられるよう彼らは努力した。都会の多くの家庭で毎日同じ時間に紅茶を淹れる習慣を作るという一定の成功を確信した彼らは、勢いに乗って地方の小さい町へ移動していった。紅茶が自ら家庭にやってくる、この紅茶協会が画策して実行された新しい現象は、明らかにインド人たちの、殊に女性層の意識を変えることになる。紅茶は着実にインド人の生活の中に根付きだしたのである。

余勢をかって次なるキャンペーンが構想され、実行に移される。首都がカルカッタからニューデリーとなった 1931 年、「工場輸送計画」[コリンガム 258] が開始される。何千人もの村人たちが集まる地元の市場には、大型トラックや屋形船によって工場から直送された紅茶が配られたのだ。もちろんその場で飲める状態にして。紅茶の配給は映画の上映と抱き合わせで行われ、とりわけ特別に囲いが設置された女性専用ゾーン内は、不特定多数の男性たちや世間の目を気にせずに気兼ねなく映画が楽しめ、紅茶を飲みかわす女性たちと子供たちの聖域として歓迎された。こうして 1936 年末にはインドの村人たちもすっかり紅茶を受容するようになっていた次第である。

第二次世界大戦中の紅茶協会は軍の後方支援に専念し、市井でのキャンペーンは中断したけれど、その作戦でも大きな勝利を手にするようになる。紅茶専用のバンを仕立てて、部隊ごとに用意した紅茶を届けて配布したのだ。

紅茶バンにはラジオや映画挿入歌のレコードと蓄音器が並置され、手紙の代筆屋が脇を固めた。海外派遣部隊や前線におかれた部隊にも彼らは随行し、紅茶を飲みながら音楽に耳を傾け、故郷や家族を思い、そして繋がる言葉を代筆者が手紙にする。命がけの戦場の中で、唯一気が休まるであろう空間の中心にはいつも紅茶があったのだ。

かくして 1945 年には、カルカッタの路上生活者ですら紅茶を飲むようになった[コリンガム 259] のである。

さて、かくしてインドにおける紅茶販促運動の概要は把握できた。次の章では収集した資料図像を読み解き、紅茶販促運動の関連資料として位置づけてみたい。

第 II 章 四枚のポスター：1920 年当時のキャンペーンの証拠から

II-1. 資料の出自

ここからは、現在はパキスタン領であるパンジャブ州のある鉄道駅で見つかり、イスラマバード郊外の鉄道博物館に収納されている駅の広告ポスターを見ながら、インド紅茶協会⁽³⁾ 当局が旧パンジャブ州の一駅で行ったであろう販促活動を推測してみたい。

2018 年 3 月 11 日、イスラマバード郊外のゴールラー・シャリーフ駅構内に併設された

パキスタン鉄道博物館（図4）を訪問し、当時の学芸員であったウルージ・イルシャード氏（図5）⁴⁾の厚意で、撮影許可を得て撮影した四枚のポスターが本章の主人公である。未公開期間だったためにサイズほか詳しいデータは分からない。イルシャード氏は「パキスタンのパンジャープ州のある駅からの寄贈品」とだけ申し訳なさそうに教えてくれた。

現在のパキスタン・パンジャープ州の駅からこの資料が寄贈されたという情報は、前述した「彼らは少数の契約者にやかん、カップ、紅茶の包みをもたせて、パンジャープと北西部の国境地域、およびベンガルの主だった鉄道の連絡駅ではたらかせた」[コリンガム255]の記述と一致している点が指摘できる。

このエリアは1931年まで英領インド帝国の首都であったカルカッタが位置するベンガル州（現在のバングラデシュ、インドの西ベンガル州・ビハール州・オリッサ州・ジャールカンド州を含む）から、新首都ニューデリー以西（現在のハaryana州・パンジャープ州、パキスタンのパンジャープ州とハイバル・パフトゥンフアー州を含む）の平原部を横断する大動脈といえる北インドの重要な広域であった。

ポスターを寄贈したパンジャープ州の駅が、現時点で特定できないのは残念だが、少なくともパキスタンのパンジャープ州にあることは間違いない。何らかの理由で他所から移動してきたものである可能性は否めないが、パキスタンのパンジャープ州内であると仮定して推察を続ける。

当時のフィールドノートを見ると、イルシャード氏の見立てではポスターの表記から、「1920年頃のもの」だということであった。まだ詳細は調査中のようであり、今後の調査結果を受けて修正していくが、現時点では1920年あたりに製作年代を仮止めて推察を続ける。ではこれより紅茶販促ポスターの吟味にはいろう。

II-2. ポスター 1/4 : HOT TEA PRICE PER CUP（熱いお茶一杯の価格）

図6のデザイン構成はA～Cに三分割されている（図7）。A 上部文字部分、B 中部イラスト部分、C 下部文字部分である。

Aは白地に黒文字の二行からなり、上の行が1. 英語、下の行が2. ヒンディー語 Hindi である。

Bは黒地にカラーイラストの二段からなり、1. 上段・2. 下段とも袖の色が水色、下段の二枚のコインが銅色（十円玉のような）、残りの部分は上段・下段ともに全て白である。

図4



パキスタン鉄道博物館

図5



当時の博物館学芸員のウルージ・イルシャード氏

Cは白地に黒文字の三行からなり、上から C-1 ウルドゥー語 Urdu、中が C-2 パンジャービー語 Panjabi、下が C-3 ベンガル語 Bengali である。

このポスターの文字部分 A と C では、各言語ともに全て文言の内容は英語部分と同じである。つまり「熱いお茶一杯の価格」という内容が、五言語で併記されているのだ。

A-1 は、英語で HOT TEA PRICE PER CUP と書かれ、「熱いお茶カップ一杯の値段」と訴える。

A-2 では、ガラム・チャー・ピー・パーヤーラー・ケー・ダル garam chaa phii paayaalaa ke dar と書かれている。ガラム・チャー（熱いお茶）・ピー・パーヤーラー・ケー（各カップ一杯の）・ダル（料金・価格）。

現代の表記ならばカップを意味するパーヤーラーは、他の言語と同様に、ピャーラー pyaalaa、ピアーラー pi aalaa（男性名詞・単数・直格）と表記され、斜格変化してパーヤーレーとなってもよいのだが、当時の表記として興味深い。

C-1 では、ガラム・チャーエ・キーマト・フィー・ピャーリー garam chaay fii pyaalii と書かれている。ガラム・チャーエ（熱いお茶）・キーマト（価格）・フィー・ピャーリー（各小カップ一杯の）。ピャーラーを基準とするとピャーリーはそれより小型のカップ類を差す。

C-2 では、ガラム・チャー（ハ）・イク・ピアーレー・ディー・キーマト garam chaah ik piaale dii kiimat と書かれている。ガラム・チャー（ハ）（熱いお茶）・イク・ピアーレー・ディー（カ

図 6 ポスター「熱いお茶一杯の価格」



図 7 ポスター「熱いお茶一杯の価格」図解

A-1
A-2
B-1
B-2
C-1
C-2
C-3

ップ一杯の)・キーマト (価格)。

C-3 では、ガラム・チャー・プローティ・ペアーラル・ダーム *garam chaa proti peaalar daam*と書かれている。ガラム・チャー (熱いお茶)・プローティ・ペアーラル (カップ一杯に対する)・ダーム (価格)。

B 中の二段は、払うべき貨幣の種類と数に対応して買える紅茶の大カップ一杯と小カップ一杯が図示されている。B 上では銀色であろう 1 ルピーの 1/16 に相当する 1 アンナ (anna) ⁽⁵⁾ 貨幣一枚が、B 下では銅貨の 1/4 アンナ貨幣二枚が描かれている。カップのイラストも大小の見分けがつくように描かれている。特筆すべきは B 下の 1/4 アンナ貨幣 One Quarter Anna / yak paaii で、このポスターの製作年代を解く鍵を提供している。具体的には、発行年であろう「1920」が見てとれるのである。実際には 1835 年から東インド会社ルピーの貨幣体系の中で鑄造されてきた 1/64 ルピーにあたる貨幣で、1920 年当時はジョージ 5 世の統治期にあった。

ウイーン会議をもって第一次世界大戦終了が 1919 年時点で、すでに紅茶の売店はインドの地に根付き、インド紅茶協会は鉄道を利用して紅茶販売キャンペーンを仕掛けたと前章でみた。「1920」という数字は、これが政府による紅茶販促ポスターであることから、ポスター内容もデザインも検閲を経て公認されたものであり、キャンペーン開始時期の指標として評価することができる。少なくとも 1920 年より遙か以前に始められたであろう鉄道利用のキャンペーンは存在しないといえる。

また図 8 に示したように実在する貨幣というものがあり、両者を比較しても明らかに別物である。このことから、ポスターで表現されたヤク・パーイー貨幣に見える数字は恣意的であり、ポスターの世界内でだけ有効かつ通用するサインであることが明らかである。

よって 1920 年をこの紅茶販促キャンペーン初期の年代と同定してもよいと思われる。

II-3. ポスター 2/4 : GARAM CHAAY PIJIYE (熱いお茶を飲んで下さい)

図 9 のデザイン構成も三分割されている (図 10)。A 上部文字部分、B 中部イラスト + 文字部分、C 下部文字部分である。下地は青色、文字と線には黒色、B に描かれている三人の人物像には赤、黄色、白が使われている。文字と言語は全てヒンディー語である。

A は横書き三行からなる。一行目 (A-1) は最も太い文字でガラム・チャーエ *garam chaay गरम चाय* (熱いお茶)、二行目 (A-2) は最も小さい文字でピジエー *pjiye* (飲んでください)、そして三行目 (A-3) がこのの中では中間的な大きさの文字でジスセー・アープコー *jis se aapko* (それによってあなたは) と関係詞節となって述べてきて、以降は C の文へと繋がり結句完成する。

図 8 発行年 1920 年の貨幣



ポスター



実物

B 部は横に三分割された上下の空間に、お茶を飲む人物像（B 上）とヒンディー語の単語（B 下）がセットになって並んでいる。

向かって左の B1 上には、スィク教徒らしきターバンを巻いた男性が、テーブルクロスの上にティーセット一式が配置された場所で、椅子に座って（椅子は見えないが）或いは立ったままお茶を飲んでいる姿が描かれている。右手にはティーカップ、左手にはソーサーを持っている。熱いお茶の証拠として湯気が上がっている。

真中の図 B2 上では、トルコ帽をかぶり髭面のイスラーム教徒の男性が床の敷物の上に胡坐をかいて座り、目の前に広げられた食布の上にティーセット一式が配置された場所でお茶を飲んでいる姿が描かれている。右手にはティーカップ、左手にはソーサーを持っている。熱いお茶の証拠として湯気が上がっている。

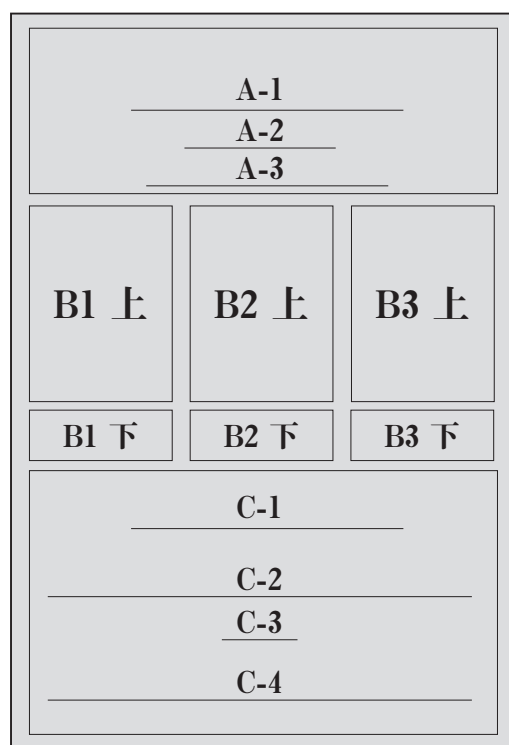
右の図 B3 上には、上半身裸で聖紐とショール、そしてドーティーであろうか下半身には腰布一枚だけを身につけたシヴァ派の聖職者か世捨人然とした敬虔なヒन्दゥー教徒の男性が描かれている。

床の敷物の上に胡坐をかいて座り、右手に茶色のカップを持っているが、ポスターからは把手を指でつまんで飲む様子はいかがえない。それどころか前述した二例には現れたティーセット、その象徴として目を引くティーポットも何もかもが見当たらない。すでにティーポットからカップに注がれた状態で提供される場所で飲んでいるのであろうか。自ら

図 9 ポスター「熱いお茶を飲んで下さい」



図 10 ポスター「熱いお茶を飲んで下さい」図解



ティーポットに触ることなく飲まなければ不都合が生じるカーストなのであろうか、明らかにシク教徒とイスラーム教徒とは扱いが別であることに注目したい。それでも熱いお茶の証拠として湯気は上がっている。

B 下のヒンディー語は各々上の人物像が表現している効用を言葉で表したものだ。

B1 下では B1 上と組んでダウラト daulat (富・財産)、同様に B2 下タン・ドゥルスティー tan durustii (健康) そして B3 下がアースドゥギー aasudgii (満足感) である。

この B 部では、どの宗派の人であっても共通して飲める飲み物だという主張が図示されているのだ。

C 部は横書き四行からなる。最も太い字の一行目 (C-1) が ハースィル・ホーギー haasil hogii (～を得えられるでしょう) と、B で各宗派の茶飲み人のイラストとともに提示された三つの効用の述語となっている。

二行目 (C-2) では最初の単語が破損していて不明瞭ではあるが文脈から判断してサルディー (寒季) だとして、サルディー・ワ・バルサーティー sardii wa barsaatii (寒季と雨季の)・ヴィマーリヨン・セー vimaariyon se (複数の病気から)・バチャーティー・ヘイ bachaatii hai (救ってくれます)。

三行目 (C-3) の一語はアウル (そして) aur と接続詞である。

四行目 (C-4) は、ガラム・マウスィム・メーン (暑季には) garam mausim men、サブセー・ズィヤーダー (最も多く) sabse zyaadaa・タンダク (涼気を) thandhak・パホンチャーネーワーリー (お届けする) pahunchaanewaalii、チーズ・ヘイ (物です)。

ここで図 8 のポスター文言をまとめて整理すると以下ようになる。

「熱いお茶を飲んで下さい。それによって富・健康・満足感が得られるでしょう。(お茶は) 寒季と雨季には様々な病気から救ってくれ、暑季においては最も清涼感をお届けする物なのです」

各宗派に配慮した人物像を用いて視覚にも訴える手法、お茶を飲むことで豊かな生活というステイタスや実質的な健康、そして精神的な満足感が得られるという物質的にも精神的にも利得が得られること。具体的には、様々な病気が必然的に蔓延る寒季と雨季において薬効があること。暑い季節に暑い飲み物 (お茶) を飲むことで得られる清涼感という快楽。

文面にある宣伝文句の範囲では看板に偽りなしである。一刻も早く心身ともに健康になり豊かな生活が送れる妙薬：お茶を口にするよう消費者の気を引くのが目的のキャッチフレーズなのである。

II-4. ポスター 3/4 : CHAAY PIINE KAA PHAAYDAA (お茶を飲むことの効用)

このポスター (図 11) こと「お茶を飲むことの効用」は、言語と文字は全てヒンディー

語であり、構成は三区分に分割され、図 12 に見えるように、上から A タイトル部分、その下が文字はなく B イラストだけで構成された部分、そして 9 行からなる C 要旨からなる。全体として白地の上に赤色の枠線が引かれ、その中でメッセージが発せられる。

目的は、どのようなものにどのように効用があるのかを具体的に述べて、日常生活とリンクさせてイメージさせ、危機感を煽るとともに購買意欲をかき立てようとするものである。

A-1 : chaay piine kaa お茶を飲むことの

チャーエ・ピーネー・カー

A-2 : phaaydaa 効用

パーエダー

B : 文字情報はなくイラストのみ。ティーポットの口から立ち上った湯気が A のスペースにまで枠を越えて頂点にまで達する。アツアツの紅茶を湛えた赤いティーポット。湯気が立ち上るティーカップ (スプーンが入っている)、ミルクポットとシュガーボウル。

C-1 : sundar shwaad 美味

スンダル・シュワード

C-2 : aarogy 無病・健康

アーローギェ

図 11 ポスター「お茶を飲むことの効用」

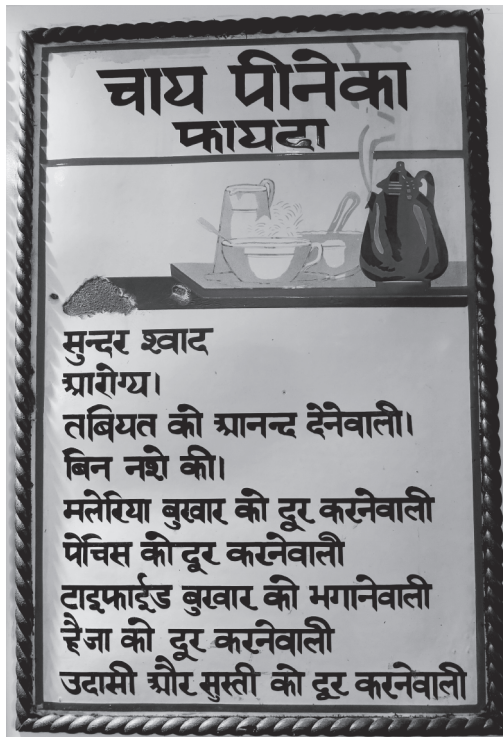
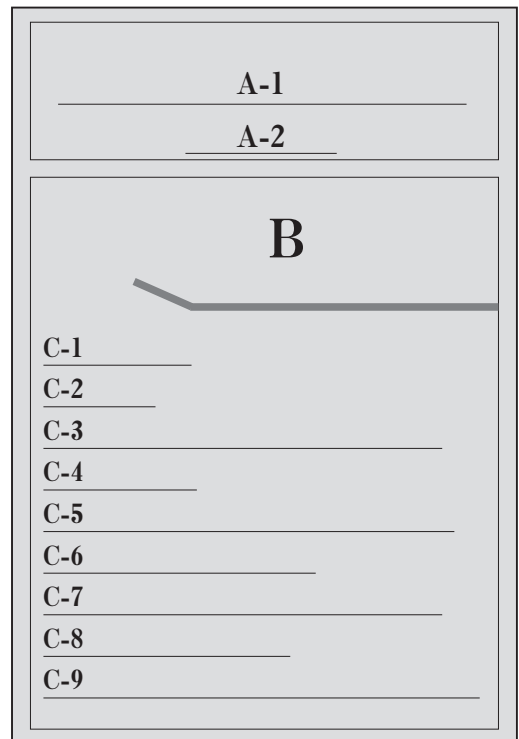


図 12 ポスター「お茶を飲むことの効用」図解



C-3 : tabiyat ko aanand denewaalii 気持ちに喜びをもたらす

タビヤト・コー・アーナンド・デーネーワーリー

C-4 : bin nashe kii 酔いはなし

ビン・ナシェー・キー

C-5 : maleriyaa bukhaar ko duur karnewaalii マラリヤ熱を遠ざける

マレーリヤー・ブカール・コー・ドゥール・カルネーワーリー

C-6 : pechis ko duur karnewaalii 赤痢を遠ざける

ペーチス・コー・ドゥール・カルネーワーリー

C-7 : taaiphaaiid bukhaar ko bhagaanewaalii 腸チフス熱を祓いのける

ターイパーイード・ブカール・コー・バガーネーワーリー

C-8 : haijaa ko duur karnewaalii コレラを遠ざける

ハイジャー・コー・ドゥール・カルネーワーリー

C-9 : udaasii aur sustii ko duur karnewaalii 悲しみと無気力を遠ざける

ウダースィー・アウル・ススティー・コー・ドゥール・カルネーワーリー

(お茶の) 味は美しく (美味しく)、飲めば無病・健康間違いなし。気分もよくなり爽快間違いないし、しかも中毒性は無し。マラリヤ・赤痢・腸チフス・コレラを寄せつけず、悲壮感と無為感を遠ざける。

全ての文は「チャーエ」という女性名詞単数の主語を省いた形で書かれている。C-1 から C-2 を発句として「美味しくて健康に！」と詩句のリズムに縛られずに言い放った後は、C-4 を除いて「～エー・ワーリー」の脚韻を調えた形を維持したまま、民衆の希求する効用を盛り込んだ内容になっている。

ほのぼのとしたイラストが添えられているものの、「もしチャーエを飲まなかったら」、あげ連ねられた様々な病気にかかってしまう、という恐怖感さえ生まれそうな迫力あるポスターである。コピーライター的能力も高いものが感じられる。

II-5. ポスター 4/4 : CHAAY PIINE KII RIITI (お茶の淹れ方)

こうして美辞麗句と恐怖心を煽るポスターを見せられてきたインド人消費者に対して、具体的に紅茶の正しい選び方そして淹れ方が示されているのがこのポスター (図 13) となる。

このポスターの構成は、全てヒンディー語が用いられ、A 上部の大小三行からなる文字情報部分と、B 下部の 10 場面からなるイラストに説明文が添えられた部分とで成立する (図 14)。

A は一行目の太字がタイトルであり、二行目と三行目がお茶の選び方に関する注意書きである。

A-1 : お茶の淹れ方 chaay banaane kii riiti

チャーエ・バナーネー・キー・リーティ

A-2a: なるべく上質な紅茶を購入する習慣を身に着けねばなりません、

badhiyaa se badhiyaa chaay byauhaar men laanaa chaahiye,

バリヤー・セー・バリヤー・チャーエ・ビョウハール・メーン・ラーナー・チャーヒエー

A-2b: 安い紅茶を求めることが儉約なのだとは理解しないでください。

sastii chaay khariidnaa kipaayat mat samjho

サスティー・チャーエ・カリードナー・キパーヤト・マト・サムジョー

A-3: 少量でも上質茶は濃い味がですが、低質茶は量こそ沢山あっても上質茶の味には匹敵しません。

thodii sii badhiyaa chaay kii tezii kii baraabarii, sastii chaay bahut adhik rahne par bhii nahiin kar saktii

トーリースイー・バリヤー・チャーエ・キー・テーズイー・キー・バラブリー、

サスティー・チャーエ・バホット・アディック・レヘネー・パル・ビー・ナヒーン・カル

ル・サクティー

B も A と同様に和訳のみを付して紹介するが、左上ー右上ー左下ー右下のように場面が

図 13 ポスター「お茶の淹れ方」

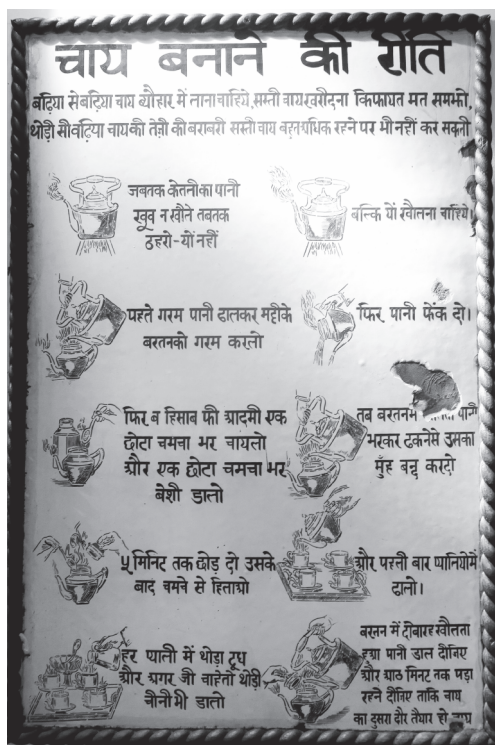


図 14 ポスター「お茶の淹れ方」図解

A-1	
A-2a	A-2b
A-3	
B-1→	B-2✓
B-3→	B-4✓
B-5→	B-6✓
B-7→	B-8✓
B-9→	B-10

進行してゆく。上から下にかけて左側 5 段が奇数番号、右側 5 段が偶数番号の場面となる。

B-1: 薬缶の水が十分に沸騰するまで待ちましょう (この図ではまだ沸騰していません)

jabtak ketlii kaa paanii khuub na khoule tabtak thahro – yon nahiin

ジャブタク・ケートリー・カー・パーニー・クープ・ナ・コウレー・タブタク・テヘロー
(ヨーン・ナヒーン)

B-2: この図のように沸騰するまで待たねばなりません

balki yon khoulnaa chaahiye

バルキ・ヨーン・コウルナー・チャーヒュー

B-3: まずは陶磁器のポットに湯を注いで器を温めてしまいましょう (図 15)

pahle garam paanii dhaalkar mattii ke bartan ko garam kar lo

ペヘレー・ガラム・パーニー・ダールカル・マッティー・ケー・バルタン・コー・ガラ
ム・カル・ロー

B-4: 温め用に使用した湯は捨てて下さい

phir paanii phenk do

ピル・パーニー・ペーンク・ドー

B-5: 人数分の茶葉を小匙山盛りで、加えて小匙一杯の余分の茶葉をポットに投入しまし
よう

phir ba hisaab phi aadmii ek chhotaa chamchaa bhar chaay lo aur ek chhotaa chamchaa bhar beshii
daalo

ピル・バ・ヒサーブ・ピー・アードミー・エーク・チョーター・チャムチャー・バル・チ
ャーエ・ロー、アウル・エーク・チョーター・チャムチャー・バル・ベージー・ダーロー

B-6: ポットを熱湯で満たしたら、ポットの蓋を閉めて下さい

tab bartan men khoultaa paanii bhakar dhakne se uskaa munh band kar do

タブ・バルタン・メーン・コウルター・パーニー・バルカル・ダクネー・セー・ウスカ
ー・ムンフ・バンド・カル・ドー

B-7: この状態のまま 5 分間待ち、その後に小匙で少しかきまわしましょう

5 minat tak chhod do uske baad chamche se hilao

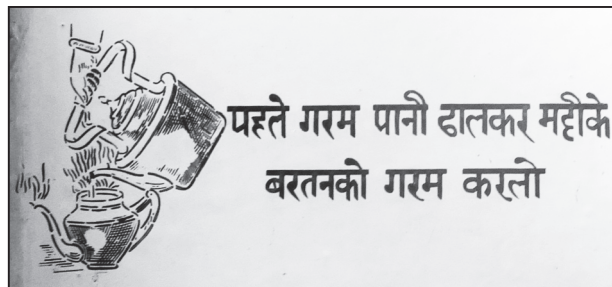
パーンチ・ミナト・タク・チョール・ドー・ウスケー・バード・チャムチェー・セー・
ヒラーオー

図 15 図 13 の B-3 拡大図

B-8: 一煎目の紅茶の出来上がり
です、カップに淹れましょう

aur pahlii baar pyaaliyon men
dhaalo

アウル・ペヘリー・パール・
ピャーリヨーン・メーン・ダ
ーロー



ティーポットを予め湯で温めておく

B-9: カップごとに少量の牛乳を注ぎましょう、お好みならば少量の砂糖も入れましょう

har pyaalii men thodaa duudh aur agar jii chaahe to thodii chiinii bhii daalo

ハル・ピャーリー・メーン・トラー・ドゥードゥ・アウル・アガル・ジー・チャーヘー・トー・トリー・チーニー・ビー・ダーロー

B-10: ポットに再び熱湯を注いで下さい、8 分間そのままにして待って下さい。二煎目の紅茶の出来上がりです

bartan men dobaarah khoultaa huua paanii daal diijie aur aath minat tak padaa rahne diijie taaki chaay kaa dusraa daur taiyaar ho jay

バルタン・メーン・ドバーラー・コウルター・フアー・パーニー・ダール・ディージェー・アウル・アート・ミナト・タク・パラー・ディージェー・ターキ・チャーエ・カー・ドゥスラー・ダウル・タイヤール・ホー・ジャージェ

このポスターから読み取れることは、インド紅茶協会の商業戦略として、協会の傘下にある茶葉販売店で上質の紅茶を買わせ、英国風の紅茶の淹れ方を強く奨励していることに尽きる。英語など一文字も使わずに、不自然な文字遣いこそあれ、全てヒンディー語で製作されたポスターに目を向け、食い入るように読み入る対象者は、少なくとも教育を受けた読み書きができ、旅ができる富裕層に属する北インドのインド人たちだ。彼らを紅茶の優良購買者に成長させ、英国側の手を大きく煩わせぬことなしに、英国風の喫茶法・喫茶道具をも含めた高級文化商品をすんなりと受容させることこそ申し分のないゴールだ。

主要な鉄道駅で展開した紅茶販促キャンペーンの中から、不覚にも誕生させてしまったインド人紅茶飲料販売人によるインド式ミルクティーことチャーエではあるが、まだチャーエが懐妊したての 1920 年頃、英国式の紅茶をインドでも広めよう、インド人に買わせよう、インド人に飲む習慣をつけさせようとして全力を注いだインド紅茶協会の大作戦の本気度が、思惑がぎっしりと高い密度で詰まったポスターの姿を通してよく伝わってくる。

おわりに

1920 年代に不本意ながらチャーエを誕生させ、1930 年代にはマサラ・チャーエへと進化を許してしまったインド紅茶協会ではあるが、加害者となった同国人として、実質的にインド人の多くを紅茶中毒にしまった咎からは逃れられないであろう。生産も消費も紅茶大国としての現インドは間違いなくイギリスが作ったのだ。

現在、インドやパキスタンでは、チャーエとティーの二種類のお茶の分類が見られる。チャーエとは一般に、細かく砕いたダスト dust と呼ばれる粉紅茶を中心に、鍋の中で水とミルクで煮出し、多量の砂糖を加えて作る飲み物である。一方でティーは、ティーポットを用い、ミルクも砂糖も別々に自分で入れる高級なイギリス風紅茶（含ティーバッグ）を意味している。

もともと、紅茶の茶葉は、仕上げの前段階の荒茶を機械篩（ふるい）にかけて、そこから落ちた芽を含んだ小型の葉と引っかかって残った大型の葉に分類されてきた。小型の葉はリーフティー（不折碎茶）No Broken Tea、大型の葉は折碎茶 Broken Tea の行程を経て商品化されてきた。

1930 年代、そこへ製茶法の革命的転機が訪れる。CTC 製法がアッサムで始められたのだ。CTC とは Crush（つぶす）Tear（引き裂く）Curl（まるめる）の頭文字をとった名称で、特殊設計の揉捻機で茶葉はつぶされ、引き裂かれ、丸められ、抽出効率の高い紅茶が出来上がるようになった。この CTC 製法は 1950 年代にはインドからアフリカにかけて広まってゆく。

輸出用茶葉だけではなく、CTC は当時のインド国内向けにも大きく貢献した。インドでチャーエに用いられている茶葉は、形態から二種類に分類されている。

一つは茶葉を顆粒状に丸め固めた「ダーナー danah」で、意味は「粒、顆粒」（ウルドゥー語）、比較的大きめの粒紅茶である。もう一つは「ダスト dust」と言われ、英語で「埃」を意味する茶葉の中で最小の形態、粉茶といってよいものである。このどちらも、CTC 技術が開発されなかったら実現できないものであった。チャーエが産声をあげた 1920 年当時の茶葉は、今現在一般的なチャーエに使われている CTC 製法のものではなく、不折碎茶か折碎茶しか製法が無かった当時の茶葉だということは確かな事であろう。

今回の研究ノートは、コリンガムの翻訳本という先行研究があり、その読解によるチャーエ誕生の記録を骨子に、パキスタンで蒐集してきた 4 枚のポスター資料を貼り付けてみて、歴史的事実の中に位置づける作業に終始したものとなった。そこには筆者自らが事前に調査し、考察を加えて提示した仮説もまだなければ、先行研究の批判的検証もない。

それでも分かったことは、伝統的なインドの飲み物として疑問符なく誰からも受容されてきたインド式ミルクティー「チャーエ（チャイ）」は、1920 年以降に誕生した新しい飲み物であり、いつまでも体制側の言いなりにはならないインド人側から作り出された飲み物であること。その歴史はちょうど 100 年を回ったところにあること。そして現時点のフィールド現場からは、いまなお進化を続け、新しいタイプのチャーエが続々と誕生していることが顕著であること。

しかし、動き回ってみて得ることができた現時点での最大の課題は、今後は紅茶販促キャンペーンの一次資料にあたり、今回見つかったポスターのバリエーションを更に確認し資料化することに尽きる。

ひと先ずは北インドのヒンディー語通用地域内を中心に、同地域でのウルドゥー語、パンジャービー語、ベンガル語が使用されている資料を蒐集し分析することになろう⁽⁶⁾。ポスターから語り掛け

図 16 ダージリン・ヒマラヤン鉄道ダー
ジリン駅の売店 TEA STALL



1881 年創業とある

られる言葉に耳を傾け、そのデザインと色彩を観察して不可視なイメージを取り逃がさぬようにつとめる、駅と駅の紅茶販売店 Tea Stall (図 16) に注目した「チャーエのインド紅茶史」を追求する以上は、まだまだ『デリーは今まだ遠い』⁽⁷⁾ である。

さて、お茶の世界の先学諸氏にも敬意を払って教えを乞いつつこの度は一煎目を終えることとする。

——注

- (1) Lizzie Collingham 2005 *CURRY a biography*, Chatto windus ran.
- (2) アクバル・イラーハーバーディーの詩 (図 17: 次頁)
http://www.columbia.edu/itc/mealac/pritchett/00urduhindilinks/txt_akbarallahabadi_miriammurtuza.pdf
- (3) The Tea Committee.
- (4) Curator : Urooj Irshad
- (5) ヒンディー語の発音はアーナー aanaa
- (6) URL 欄に載せた英語による Youtube 番組 “History of India” では今回読み解いた四種類のポスターの中で、図 6 を除いた三種類のポスターの他言語版ポスターの一部が紹介されている (図 18~19: 次頁)。しかし脚本はコリンガムを底本とした内容の域を出ない。
- (7) 「目標達成はまだ先のこと」ハヌーズ・デヘリー・ドゥール・アスト hanuz dehlī duur ast (ペルシア語)、ディッリー・アビー・ドゥール・ヘイ dillī abhī duur hai (ヒンディー語)

——参考・引用文献

- 岡光信子 2007 お茶とお菓子『インドを知る事典』山下博司・岡光信子、pp.143-154、東京堂出版
- 古賀勝郎・高橋明 2006『ヒンディー語＝日本語辞典』(第5刷: 2019) 大修館書店
- 小西正捷 2009 インド紅茶史ノート『インド考古研究』31号、pp.69-79、インド考古研究会
- コリンガム、リジー 2006『インドカレー伝』(訳) 東郷えりか、pp.243-271、河出書房新社
- 菅原純 2005 「茶」『中央アジアを知る事典』、pp.333-334、平凡社
- チシュティー、N.A. 2002『パンジャープ生活文化誌—チシュティーの形見』(監訳) 麻田豊・(訳注) 露口哲也、東洋文庫 702、平凡社
- 角山 栄・関口真理 2012 「茶」『[新版]南アジアを知る事典』、pp.500-501、平凡社
- 村山和之 2000 インド亜大陸のミルクティーとチャーイ『アジアの食文化』(編著) 秋野晃司・小幡壮・澁谷利雄、pp.117-121、建帛社
- 山根聡 2019 十九世紀後半の北インドにおけるムスリム文人と食—郷愁と動揺『食から描くインド』(編著) 井坂里穂・山根聡、pp.53-86、春風社
- Acharya, A.T. 1998 *A Historical Dictionary of Indian Food*. Oxford University Press India.
- Burton, David 1993 *The Raj at Table – A Culinary History of the British in India*. faber and faber, London-Boston.
- Fallon, S.W. 1879 *Chae, Cha*, Fallon's A New Hindustani English Dictionary, p.514. (rep. 1998) Asian Educational Services, New Delhi, Madras (India)
- Frembgen, Jürgen Wasim 2017 *A Thousand Cups of Tea: among tea lovers in Pakistan and elsewhere in the Muslim world*. translated from German by Jane Ripken, Oxford University Press.
- Hankin, Nigel 2003 *Hanklin–Janklin*. India Research Press, New Delhi.
- Platts, John T. 1884 *ca (Chinese tsha)*, A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English. p.416, p.420, University of Oxford.
- Yule, Henly (Col.) and A.C.Burnell 1886 *TEA*, HOBSON-JOBSON, pp.905-909
(rep.1990) Rupa & Co, India. (rep. 1988) Munshiram Manoharlal Publishers Pvt.Ltd. New Delhi (India)

図 17 アクバル・イラーハーバーディーの詩

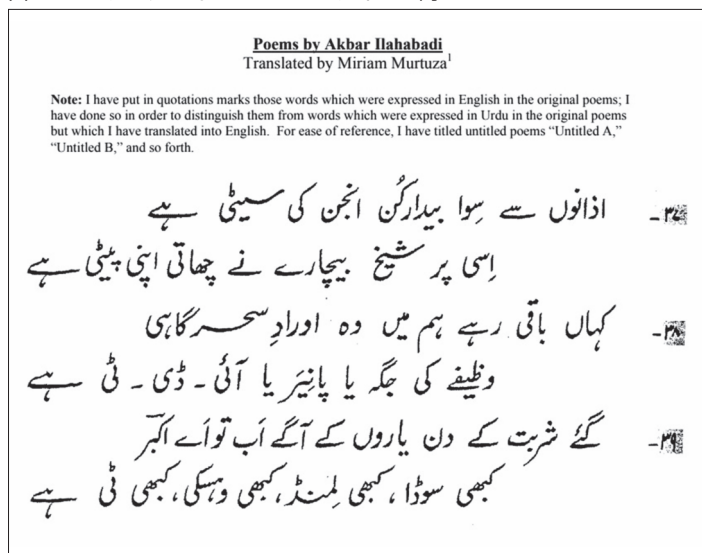
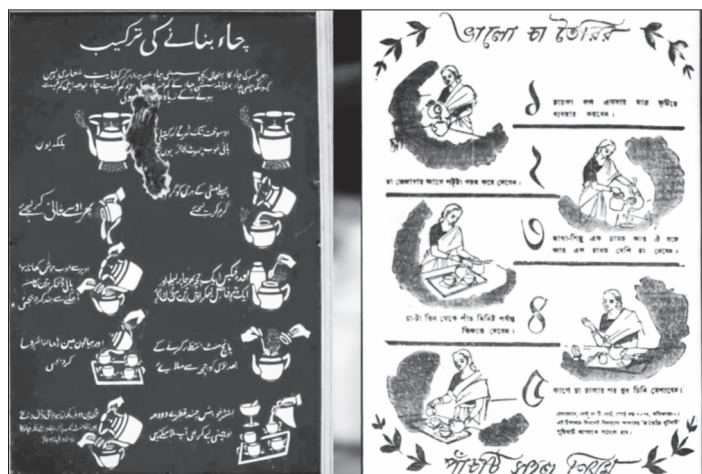


図 18 「お茶の淹れ方」



ウルドゥー語（左）、ベンガル語（右）

図 19 本文中の図 9 と同形の挿絵

